

『俳諧玉言集』冬之部翻刻と

「平泉」は『曾良旅日記』通りの順路か

杉田 美登

ここに翻刻する『俳諧玉言集』は越後高田現在の新潟県上越市榊原藩士、鈴木（左内）魚都里なづりが天保一三（一八四二）年に編さんしたものである。それまで芭蕉の最大の全集として世に知られた水戸藩士の幻窓湖中（岡野重成）と古学庵仏兮が編さんし文政一〇（一八二七）年に刊行した『俳諧一葉集』の収録をさらに更新したものであり、今なるべく忠実に翻刻するものである。

芭蕉が生涯に詠んだ句は九八二句を数えるが、さきの『俳諧一葉集』が発句一〇八三句であったのに対して『俳諧玉言集』では一二二二句を収める。ここに芭蕉句の全てを収録しようという姿が見られ、当然誤伝・存疑の句が多く混入してことは当然であるが、越後の地において芭蕉の句を全て網羅しようとした意気込みと芭蕉の全作品を収集しようとした意欲と関心の高さを考えたときに俳諧史上において大きな意義がある。

六十七丁裏

○冬の部

時雨 冬の雨 寒雨

手津から雨の詫笠をはりて

つ世にふるは更に宗祇のやとりかな

泊船 しくれかな

洪笠記あり 文章之部に出。句集 疑の加に問ふかおもふの二つあり。此の所はとふかなり。

泊船に此の句笈日記には、世の中はと上五文字を出せり。筆の誤りなるべしと云へり。

句撰には、世の中は更に宗祇のやどし哉と有り。みなし栗には、下五文字やどし哉と有。

一本にみつから雨の詫笠を張て物やあるらん、音やあられの板ひさし。禪を極め給ふ時の句也と云々。

宗祇の句は東にくだりし時、庵室にて手つから雨の詫笠を張て。世にふるはさらに時雨のやとり哉とあり。猶文章之部に洪笠の部と出る。

名護屋へ入る道の程諷吟す

草枕犬もしくるゝか夜のこゑ

此句野ざらし紀行に狂句風の句と並て出たり

荒野 句集 句撰

三歌仙に旅亭桐葉

林氏桐葉のぬし、こころざし浅からざれば、暫くとまらんとせし程に、

此海に草鞋を捨ん笠しくれ

草庵

拾遺に熱田にてとあり。付会集 句集貞享元

人々をしぐれよ宿は寒くとも

附会集 十月十一日餞別会 五十韻連衆十人

拾遺に、寒けれどとも

旅人と我名呼れん初しぐれ 続みなしくり 初霽

猿蓑 句集元禄二 あらまき

笈の小文 笈日記 泊船 句撰 あらまき

元禄三年の冬会わず之草庵より武江におもむくとて島田の駅塚本が家にい

一屋根は時雨る雲か富士の雪 一に山

たりて

泊船 拾遺と句集 貞享四

宿かして名をなのらする時雨哉

按に三年は四年誤なるべし 二年三年共に湖辺にて越年也

六十八丁面

句集 あらまき 続猿等に宿かりてと出せり。

山城へ井手の駕籠かる時雨かな 句集 貞享四 句撰

句集元四

野伊賀へ帰る山中にて

初時雨猿も小蓑をほしけ也 猿蓑 卯辰集 句集 元禄二 初便

馬方はしらし時雨の大井川

句撰 泊船 あらまき 万葉消息

泊船に、塚本氏に詠草あり。

いつくしくれ笠を手に提てかへる僧

泊船 伯水へ消息 句撰 句集同上

拾遺に元禄二 短冊に書て桐葉玉ふ

句元禄二

笈日記 元禄六年神無月三日の夜許六亭にて

一葉に、天和已然の吟とせるは誤なるべし。

六十八丁裏

句集には元禄五

此、許六亭江戸在番なるべし。五年なるべし。

離別の辞

拾遺 人のかたへ初て行て

初しぐれ初の字を我時雨かな 句集追加

美濃垂井の宿規外がもとに冬籠して

作り木の庭をいさめるしぐれ哉 拾遺 句撰

戸田権太夫亭にて

一しぐれ礫や降て小石川 句集 拾遺

時雨行や舟の帆つなに取付て もとの水 句撰 てにをは抄

鶏の声にしくるゝ牛屋かな(存疑) もとの水

途中時雨

笠もなき我をしぐるゝ河と川 三歌仙

一葉にこはなんと

鳴海鍛冶出羽の守氏雲亭にて

六十九丁面

面白し雪にやならん冬の雨 附合集 笈日記 句集 泊船 句撰

あらまき

旧里の道すがら

しぐるゝや田のあらかぶの黒む程る 句集元三 泊船 句撰

雁さむく鳥羽の田面や寒の雨 句集追加 句撰

こがらし

名護屋に入る道の程諷吟す

狂句風の身は竹斎に似たるかな

冬の日集是頃の句也。野さらし 句撰 あらまき 泊船にあし。マ

竹斎のこと文章の部に云。

●或は名のかな、浮かなの二つあり。石の或は柳かな、桜哉の類也。浮哉は此似たる哉。なつかしき哉、みゆる哉の類なり。然るに蕉翁の著述の桐一葉と云ものに浮ぶ哉は嫌れたれば、今俳諧者諸派はうきかなとてせづ事のやうに覚えたり。されど、哉の句もあり。または人の句もとられましきに、いくらもあるは、禁するにはあらねど発句文字扱すくなければ哉の正例のごとくつかふことは自然と魂こもらざる故好まさりしと見えたり。名の哉にても必ず上に哉に折合ぬ詞あり。たとへば、かへる浪哉と云は、うらやましくもかへる哉。浪がといふ事也。さればにや、うきかなりとするべし。

句後に狂句の二字をぬき玉ふと云々。文章の部。葉・句撰 句集 △名残哉と

ひけるこたへに、うきは茶の葉をつみし跡の独かな 桐葉と三歌仙にあり。

贈桃隣新宅自画賛

笈日記には、牡丹しべを深く這出る蜂の名残とあり。一説に、後に藁の字をぬき給ふと云々。○一葉に、いでん 句集二十四丁

寒からぬ露や牡丹の花の蜜 句集元禄七 泊船集 句撰

竹画賛

一葉に悼大巖和尚とあり

こがらしや竹にかくれてしつまりぬ 句集貞二

心地あしくて欄本起倒子へ藁の事言遣すとて

木枯や頬腫痛む人の顔 猿みの 句集元禄二 離のや

藁なくさらでも霜の枕かな (新出)

美濃耕雪別墅

七十丁表

六十九丁裏

杜国が庵を尋て

木からしに匂ひやつけし帰花

さればこそあれたきまゝの霜の宿 あらまき 句集貞四

三河新城の家中菅沼権右衛門宅

荒野と泊船には、人の庵を尋てとあり。

京に飽て此こがらしや冬住居 あらまきに、厭てとあり。句集元四 泊船

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

句撰に京に侘て

句集に、今朝の雪

鳳来寺山に参籠して

後拾遺 土屋四友を送りて鎌倉にまかる

木からしに岩吹とかる杉間かな

霜を踏で謔 びっこ・じんはい 跋ひく迄送りけり

句集元四 泊船集 句撰

もとの水に、かまくらに行人を送りてとあり。

摘けんや茶を木枯の秋ともしらで 拾遺

貧山の釜霜に啼声寒し みなし栗 泊船 句撰

風の町にも入るや鯨壳 (誤伝) 後拾遺

こがらしの吹やるうしろすがたかな 後拾遺

深川大橋成就せし時

とにとまりて二句

元禄六年也

霜

有かたやいただいて踏橋の霜 句撰

からからと折ふし凄し竹の霜 (存疑) 句集追加

紙子にも霜や置かど撫て見し (存疑) 句集追加

あらまき 我衣に

檣ヒツジ (禾編) 田に霜の花見る朝かな (存疑)

もとの水

爐開 口切 火燧

火桶 埋火

七十丁裏

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき 深川集 句集 泊船 句撰

雲炉ひらきや左官老ゆく髪の霜 句集元五 句集泊船 句撰

●此ゆくも天邇波也。

硯このむ奈良の法師か火燧哉

行く岸寺仏頂和尚の山居の跡 (存疑) もとの水

住つかぬ旅の住居や置き炬燵

●詠や

句撰とあらまきに、旅のこころや。 猿蓑 句集元三 泊船 古撰

ふるさき世をしのびて

霜の後なでしこ咲る火燧かな 句集元三 泊船 句撰 あらまき

○阿仏の道記 はし書略

君をこそ朝日とたのめふるさとにのこる撫子霜にからすな

思ひおく心とどめはふるさとの霜にもかれしやまとなでしこ

この歌のこころなるべし。

あらかねの土よりおこる火燧かな (存疑)

もとの水

きりぎりすわすれ音に啼火燧哉

○一に火桶

少年をうしなへる人に 荒野に或人の追悼に

埋火もきゆや泪の煮る音 笈日記 句集元元泊船

○疑のや

曲水旅館にて

七十一丁表

埋火や壁には客の影法師 続猿 句集元禄六 句撰

河豚

あら何ともなきのふは過てふくと汁 句集 文章之部

延宝五年冬、桃青三百韻之一句也。

あらまあさつと又さつとも

三歌仙 貞享はじめのとし桑名に遊ひてあつたにいたる

遊び来ぬ河豚釣かねて七里まで 句集

ふく汁や鯛も有のに無分別 拾遺 古撰

家にふるき奴僕ありてかたく聖の教を守る

兄弟のくすし憎むや河豚汁(存疑) もとの水

大根

七十一丁裏

口上に書落しけり土大根(存疑) もとの水 消息

玄虎子旅館にて菜根を喫し終に談話す

武士の大根辛きはなし哉 句集元六 あらまき 拾遺に、終日丈夫と談話す。

○イに、にがき

炭俵 大根と云う事を

鞍壺に小坊主のせて大根引 句集元六 泊船 句撰

菊の後大根の外さらになし 句集元四 泊船 句撰

さらには、ここではなんぼうでもの意 べつだんに

冬こもり

屏風には山を画て冬こもり 拾遺

野馬と云ものゝ四吟

金屏の松の古さよふゆこもり 拾遺

許六へ消息と句撰には、松のふるびやとあり。 泊船 あらまき 古撰

冬籠またより添ん此はしら あら野 句集 古撰 泊船 句撰

七十二丁表

しはらくかくれ居ける人をなぐさめて

先祝へ梅をこゝろの冬籠

●此をは、下の打あふへき詞を略したる也

荒野には、しばしかくれ居ける人に 一葉に、文章あり。この句は王仁の難

波津の歌のこころばえなるべし。

贈洒堂

難波津や田螺の蓋も冬籠

泊船に此詞書市の庵に見へたまへとあり。

文章之部 句集元二 あらまき 句撰

千川亭

折るに(折々に)伊吹を見てや冬こもり

笈日記 句集元四 泊船 句撰

さふさ 寒氷

三河の下地の茶店にて

○一葉に、池下の茶店にて

ごを焚て手拭あぶる寒かな

一葉に松葉を焚てとあり。句撰には火を焚てとあり。笈日記 句集貞享四

泊船

ごとは松の落葉のこといふと、又すべて落ち葉の事をいふとも。松の落ち葉をこふともいふ。

越人と吉田の駅にて

寒けれど二人寝る夜ぞ頼母しき 荒野 笈の小文 泊船 句撰 あらまき

天津繩手

七十二丁裏

冬の日や馬上に氷る影法師

笈日記 句集 泊船 句撰 等にすくむとあり。

笈日記には冬の日やとあり。

泊船集 深川冬夜感

櫓声波を打て腸氷る夜や泪 句集、延宝・天和之頃。句撰 泊船 一葉も同

茅舎買水

氷苦く堰鼠が咽をうるほせり 虚栗 泊船 句撰 句集 一葉

生ながら一つに氷る海鼠かな

附合集に、一折 古撰 句集元七

芹焼や縁輪の田井の初氷

附合集に、酉霜月とはし書あり。句集元禄六 泊船 句撰 あらまき

瓶破るゝ夜の氷の寝覚かな 句集元六 拾遺

仙化が父追善

袖の色よごれて寒しこいねずみ 句集 拾遺

塩鯛の歯くきも寒し魚の柵

泊船に、年の暮之部に出せり。句集元五 句撰

あらまき 消息にあり。

葱白く洗ひ上げたるさぶさかな 句撰に、洗ひたてたる 句集元五

泊船 句撰

によきによきと帆柱寒き入江かな (誤伝) 句集追加 句撰

綿弓や窓に入日の影寒き (存疑) 拾遺

冬寒し欠ひをうつす息の色 (存疑) 後拾遺

雪 あられ

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす 笈日記に、古益亭とあり。のざらし 句集

草の枕に寝あきてまたほのくらき中に濱の方に出て地蔵堂の柱に書つく。

明ほのや白魚白き事一寸 野ざらし紀行 句集

笈日記に、此五文字いと口おしとて、後には明ほのともきこえ侍し。

雪見にありきて抱月亭

市人にて是うらん雪の笠 附合集 あらまき 句撰

泊船に、市人よ此笠うらふ雪の笠 野ざらしにも、此の笠うらふとあり。

いでとは、はやこれ

旅人を見て 泊船には、見る

馬をさへながむる雪の^{あした}且 かな 春の日 三歌仙 句集 句撰

杜国亭にて中あしき人の事など、とりつくる ひて

雪と雪今宵師走の名月か 笈日記 句集、貞享元 泊船 句撰

箱根こす人もあるらし今朝の雪 笈日記 附合集

句集 句撰

らしいは、そうな。らしとべしと混しやすし。

花はちるらし・ちりそうな 花はちるべし

深川貧の中

米買に雪の袋や投頭巾 句集貞享三 泊船

卒都婆小町の賛

七十四丁表

たふとさや雪ふらぬ日も養と笠 文章の部に出 句集元四 泊船

君火をたけよきもの見せん雪丸け 続みなしくりに、対友人

曾良へ文章 句集貞享三 泊船 句撰

閑居箴^{しん} 文章の部に出

酒のめはいと寝られね夜の雪 あらまき 句集貞享三 泊船 句撰

はつ雪や幸庵にまかりある 句集貞享四 泊船 句撰

十二月九日初雪の悦びとあり。

句集 鳴海の駅本陣僕言亭に泊りけるに飛鳥井雅章の君、都をへだてと

詠て主へ給りけるを見て

京まてはまた半空や雪の雲 附合集 笈の小文

句撰 句集

熱田の宮御修復なりぬ

磨直す鏡も清し雪の花

句撰に、雪の玉とあり。附合集貞享四年十二月二十四日として此句にて

歌仙あり。三歌仙に、御しふくある御社にふたゝびまふてゝと あり。

笈の小文 笈日記 泊船 句集

兼日の会 笈日記に、ある人の会とあり。

七十四丁裏

ためつけて雪見にかかる紙子哉 附合集 笈日記 泊船 句撰

いさ行ん雪見にころふ処まで 泊船 古撰 いさゝらはとあり。 笈の小文

阿羅野 句集 附合集

去年のわび寝をおもひ出て越人に送る

二人見し雪は今年も降けるか 句集 貞享五 泊船

○去年杜国が保美よりしのびあるを聞て、越人と吉田の駅に泊りて寒けれ

ど二人寝る夜ぞたのもしきと云句を思い出て也。

猿蓑 信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈のこし ●詠のやの転倒

句集貞享五 泊船 句撰 あらまき

元禄二霜月朔日伊賀良品亭

いさ子どもはしりありかん玉あられ 三歌仙 句集元禄元年 一葉 句撰

一本に、あかさ

山中に子ともと遊ぶ

初雪に兔の皮の髭つくれ 雪の日にとも

消息あり 句集元二 泊船、雪の中とあり

奈良にて

初雪やいつ大仏の柱たて 消息の部に、雪かなしとあり 笈日記元禄二

柳栄興をよるこびとあり

七十五丁表

自画自賛

いかめしき音や霰の栓木笠 句集元禄二 泊船 句撰 あらまき

雪の朝ひとり干鮭を咬得たり 句集 一葉に干鮭

膳所の草庵を人々訪ける時

霰せよ網代の氷魚煮て出さん 句集元禄二 拾遺

旅行

初雪や聖小僧の笈の色 句集元三 泊船 句撰

おのが音の誰人となん世にさたせられて、老の後志賀の里にかくれ侍しと

也。今大津松本あたり智月といふ老尼のもとに尋て、かゝる 事などかたり

けるいいておもしろさに、

七十五丁裏

少将のあまのはなしや志賀の雪

●拾遺に、大津にて智月といふ尼のすみかをねておのが音の少将とかや、

老いの後此のあたりちかくかくれ侍りしといふを思ひ出たとあり。

湖水眺望

比良三上雪かけわたせ鷺の橋 句集 句撰

一つに、さし

常にくむ鴉も雪のあした哉

泊船・句撰ともに、日頃にくむと有り。

句集元四

深川大橋半かゝりける時。一に、頃。

初雪やかかけかゝりたる橋のうへ 句集元五 泊船 古撰 ○上に出す霜の部

に、柳成距の句あり。可見合。

雑炊に琵琶聞く軒の霰哉 句集元六 泊船 句撰

初雪や水仙の葉のたわむ迄 句撰に、程

句集 泊船

竹の讚

たわみては雪まつ竹のけしき哉 句集元六

句撰に、持。

寒山自画

庭掃て雪をわするゝはゝ木かな 句撰 あらまき

七十六丁表

霜月八日即興

いさみ立鷹引居るあられ哉 (誤伝)

○附合集に、此附合を杉風自筆にて写之也とありて、翁の発句あり。続猿蓑に、いさみ立鷹引き居る嵐哉として、里圃のわき、第三は翁也。可後正。

夜着は重し呉天に雪を見るあらん みなしくり 泊船 句撰

草庵に土あり

木枕の油ぬくふやよるの雪 (存疑) もとの水

琵琶引の夜や三弦の音あられ もとの水

一葉、如行亭とあり。

大雪や婆々ひとり住藪の家 (存疑) 素堂か消息 もとの水

雪の竹笛つくるべう節あらん もとの水 べき あろう

初雪やあれも人の子皮拾ひ

の葉を落るより飛ほたる哉 (誤伝) 後拾遺

○与或人文 冬しらぬ宿や初する音あられ この 句を落したる故こゝにし

るす。猶文章の部に前文あり。

六出花 一葉に耕月亭にてとあり。

ほ雪をまつ上戸のひたひいなひかり 拾遺 一葉に、貌や

神祇 釈教

七十六丁裏

落葉

留守の間にあれたる神の落は哉 句集 句撰 泊船

霜月のはじめ武江にいたる

都出て神も旅寝の日数かな 句集元四 泊船

恵比須講酔売に袴着せにけり 続猿蓑の 句集 泊船

神無月二十日深川にて即興 ○にありのつゝまりたるにて。里に心也。

ふり売の雁あはれ也えひす講 炭俵 句集元六 泊船 句撰 あらまき

御命講や油のやうな酒五升 句撰に、御影講也

句撰 泊船

此菊鶏頭切つくしけり御命講 消息の部

京に鉢叩聞きて

長嘯の墓もめくるか鉢叩き 一に、や

一葉集に、落柿舎に鉢叩きを待ちてとあり。句集元禄一 泊船 句撰 万菊

丸へ消息

納豆きる音しばしまて鉢叩 句集元五 泊船 句撰

七十七丁表

水鼻に誠見せけり御取越 (誤伝) 句撰

●明石主水へ消息

御命講やおほけな事は身延山

身延山の碑にありと或人の話なり。未知是非。

鳥 虫

三歌仙 尾張國熱田にまかりける頃

人々師走の海、見んと船さしけるに

海くれて鴨の声ほのかに白し 野ざらし

らまき

けごろもにつゝみてぬくし鴨の足 続猿 句集

句撰 あらまき

一匹のはね馬もなし川千鳥 (存疑) もとの水

句集 呼統の濱は、日くれてかく笠寺は雪の降る日

星崎の闇を見よとや啼千鳥 ●とて 笈の小文

附合集 荒野 泊船 句撰 あらまき

句撰追加 杜国が不幸をいらこ崎に尋て

七十七丁裏

鷹の声を折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき 句撰追加

笈日記 訪杜国紀行

鷹一つ見付てうれし伊良子崎 笈の小文 泊船 句撰 あらまき

杜国に対して 保美の文章あり。文章の部に由。

いらこさき似るものもなし鷹の声

ある庵にて

冬庭や月もいとなる虫の吟 句集元二 拾遺

あらまき

水 草

多度権現を過るとて

宮人よわが名をちらせ落葉川 句集貞享四 泊船 句撰

句集 防川亭探梅 笈日記に、ある人興行

七十八丁表

香を探る梅に蔵見る軒端哉 泊船 句撰ともに、家見るとあり。笈日記 句

集 笈の小文

大通庵の主道圓居士、芳名をきく事久きまゝに、まみへん事を契りしに、

終に日をまたず初冬の一夜の霜^{一に、雪}と消ぬ^{泊船に、降ぬ}。けふははや一めぐりにあたりぬと

いふを聞て

そのかたち見はや枯木の枝の長 句集元禄元 附 合集

句撰に、其方をとあり

大津にて

三尺の山もあらしの木葉かな 句集元三 泊船 句撰

月の沢と聞ける明照る寺に旅の心を澄して

尊かるなみだや満てちる紅葉 笈日記に、元禄五年神無月のはしめとあり。

句集に四年

附合集 泊船 句撰

韻塞に、十月宿明正照寺 元禄辛未干時四十八歳

当寺此平田に地をうつされてより、已に百年におよぶとかや。御堂奉加の

辞に曰、竹樹密に土石老たりと。誠に木立物ふりて、殊勝に覚へ侍れば。

百年の景色を庭の落葉かな 句集元四 泊船 句撰

○李由は、江州平田遍照寺僧字、買年釈名売賜上人芭蕉門也。或人話、彦根よ

り八丁あり。平田村明照寺西本願寺等、寺一二の大寺也。

保美の里

梅椿早咲ほめん保美の里 文章の部 句集元四

元禄五年十二月二十日即興

折寄て花入探れうめ椿 句集 附合集 泊船 句撰 あらまき

冬枯や世は一色に風の音(存疑) もとの水

病中の吟 元禄七年十月八日

七十九丁表

平泉の足跡は『曾良旅日記』通りか

交通機関を用いたり、歩いたりの『おくのほそ道』実地踏査は昭和四十七年から行ってきたが、一人千住から徒歩による『おくのほそ道』実地踏査に切り替えて十年になる。『旅日記』をもとに芭蕉と曾良の足跡をたどり、江戸時代の旅を追体験することでその文学性を追求するものである。本文と『旅日記』の比較をしつつ、徒歩による実地踏査を繰り返すうち素朴な疑問点が浮上する。ここでは「平泉」における二人の足どりについて、「平泉地図」(昭和四十一年・国土地理院作成)および『平泉全盛略絵図』なる資料を参考にして曾良の『旅日記』の記載をみることにした。以下は、元禄二(一六八九)年五月十三日(陽暦の六月二十九日)、一関から平泉を訪れた一日である。(便宜上数字を入れてみた)

- 一、十三日、天気明。巳ノ刻ヨリ平泉へ趣。一リ、山ノ目。耆里半、平泉へ以上式里半と云ドモ式りに近シ。(伊沢八幡耆里余リ奥也)。1高館・
- 2 衣川・3衣ノ関・4中尊寺・5(别当案内)光堂(金色堂)・6泉
- 城・7さ榎くら川・8さくら山・9秀平衛やしき等ヲ見ル。10泉城ヨリ西霧山見ルト云 ドモ見ヘズ。ニタツコクガ岩ヤヘ不行。三十町有由。11月山・12白山ヲ見 ル。13経堂ハ别当留守ニテ不開14金鶏山見ル。15シミン堂、无量劫院跡 見。申ノ上剋帰主、水風呂敷ヲシテ待、宿ス。(『おくのほそ道』岩波文庫)

これに従い辿ってみると、1)高館から奥州道中を辿り、2)衣川3)衣の

関そして衣の関道を通つて4)中尊寺と辿っている。ところがこの先いきなり

衣川を隔てた5)泉城に赴いていることに疑問が出てきた。曾良の『旅日記』

には、脱字や文字の重複もまま見られることから、あるいは順序を書き誤ったとも考えられないこともないが、他にこのような例はない。また、「月山・白山ヲ見ル。」と記しているが、能舞台の白山神社は金色堂付近であることからついでのことである。しかし、月山神社は和泉城から徒歩で十五分ほどの近距離とはいえ、登らなければ見ることができないことからやはり記載通りと考えた。すると疑問になるのが、順路にかかる所要時間であるが、これまで何度か訪れたものの、どうも三、四時間で巡るのは無理なのである。

すると泉城から月山に登った芭蕉と曾良の帰路は、泉城裏の川東集落を通り、衣の関道を横断し衣川橋まで戻り右折して奥州道にしたがったものであろうか。そして、左にさくら山(束稲山)を、右手に無量光院跡を見る。このあたりから金鶏山が右手に見える。さらに加羅御所跡(秀衡屋敷)を見て、一路一関に向かったのであるが、「平泉」の章に「金鶏山のみ形をのこす。」と記した光景は、高館からでは視界に入らず、無量光院跡・加羅御所跡付近での景観だったことがわかる。

初めて訪れた芭蕉と曾良にとって平泉での手際よい行動や、泉城での「泉城より西霧山見ルと云へドモ見へズ。」「タツコクガ岩ヤへ不行」の表記から案内人が介在したことが伺える。の存在が伺えてならない。

一関・平泉間の歩行速度

芭蕉と曾良の足の速さから、忍者であったなどと聞くこともしばしばであるが、交通機関を足に頼らざるを得なかった当時の人々の普通の速度であった。

ここで二人の足の速さを示し、もって平泉での足跡を検証したいと思う。一関から平泉までの距離を曾良は、「式リ二近シ」と記している通り、八キロの道のりである。平成十八年八月二十七日(日)に辿った記録が以下の通りである。一関駅付近を十二時二十四分に通過し、陸羽街道の山ノ目駅入り口付近を十二時四十四分。そして平泉駅前と奥州街道の交差点に十三時四十九分に到着した。

芭蕉と曾良は一時間に六キロほどと考えられるので一時間二十分ほどで平泉に到着したと考える。したがって一関を「巳の刻」つまり、午前九時に発ち十時二十分ころには平泉に到着していたと考える。

芭蕉と曾良が平泉に滞在した時間内の行動を探ろうと考えた。平泉は二キロ四方に収まる程の町であるが、芭蕉と曾良の見巡った地を『旅日記』に従ってみると、一関に「申の上刻」として「申の刻」でも「下刻」でもないことから、午後三時ころである。仮に四時とするなら、二時四十分頃には平泉を発つていなければならず、平泉滞在時間は四時間以内ということになる。

『旅日記』に「水風呂」の記載をしたことは、飯坂温泉などは別として塩竈での銭湯、尾花沢の要泉寺そして平泉の三カ所であり、曾良にとってもちろん芭蕉にとってもこの上ないご馳走であり、良い一日だったことを伺わせる。日

照時間の長い季節であるから、一関の宿でくつろいで『旅日記』を認めたようである。曾良の筆跡・表現からは後日のまとめ書きではなさそうであるから、日も落ちない申の刻に到着したと考えてよい。

先、高館にのぼる

芭蕉は「先高館にのぼれば」と本文『おくのほそ道』『旅日記』共に同じであり、最初に高館を目指したのである。今もほぼ変わらないであろう山の眺望は、東中央に東稲山が左に駒形峯、右に観音山である。地形がすっかり変化しているのは、東稲山近くに流れている北上川と石段を上ると祀られている義経堂であろう。

さて、芭蕉が感慨深く「笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」と記しているこの感慨の深さは、唐突のものではなくここに至るまでには、次のような伏線がある。例えば、「佐藤庄司が旧跡」で、源義経に従って戦死を遂げた佐藤継信・忠信の二人の嫁の孝心に涙を流す場面である。

女なれどもかひがひしき名の世に聞こえつる物かなと袂をぬらしぬ。隕涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば爰に義経の太刀・弁慶の笈をとどめて什物とす。

のくだりである。また、泉城に藤原忠衡への関心についても本文「塩竈」の章に、

神前に古き宝塔有。かねの戸びらの面に、「文治三年和泉三郎奇（寄）進」五百年來の佛、今日の前にうかびて、そゝろに珍し。渠は勇義忠孝

の士也。

と絶賛し、「石巻」の章でも、

十二日、平和泉と心ざし、

と暗に泉城に対する関心の深さが伺い知られる。芭蕉は、文治五年（一一八九）閏四月三十日、源義経が藤原泰衡の兵に襲撃されて悲壮な最期を遂げた高館に佇み義経を偲び、泉城に佇んでは、和泉三郎忠衡を偲んだのである。そのとき佇んでみた景観が「衣川は和泉城をめぐるて、」であったであろう。でなければ泉城を囲む川の景観は見る事ができない。人から聞いたとは考えられない。

泉城と中尊寺の間に川はなかった

泉城跡には一軒の民家があり、その裏手にある忠衡の墓碑から望む景観は芭蕉が目にしたものでもある。南に中尊寺の山と林がはだかり高館はその陰になつて見られない。そして、南東に東稲山があり、北は木立のために眺望が利かず、西は木立の他は眺望が利かない。南西に僅かに山並みが見られるばかりである。あの山並みが『旅日記』にある「泉城ヨリ霧山見ゆるト云ドモ見ヘズ」の霧山ではないかと思いつつ、民家の方に尋ねてみると「霧山は知らない。」という。泉城の周りの地形は東・北・南がぐるりと北を馬蹄形に衣川が巡っている。まさに「衣川は和泉城をめぐる」って本文通りでありこの地点からの景観となる。

平成二十一年九月二日の実地踏査は、次の通りである。平泉 10:38……高館 11:00～11:10……衣川橋 11:37……衣の関道道標 11:57～12:12……和泉城

12:30～ 13:13…… 川東集落に戻り、月山神社麓（和我叡登拳神社）・三峯神社 13:28 …… 頂上の月山神社 13:41 …… 上山 13:51 …… 衣川橋 14:35 …… 月見坂・中尊寺 15:40 …… 無量光院・伽羅御所 16:47 …… 駅前付近 16:55

これでは完全に時間オーバーである。衣川が妨げとなり、道に迷ったりすることから、時間の経過を余儀なくしてしまったのである。しかし平泉の町（駅付近）から高館での見学を入れても衣川橋までは、およそ一時間の範囲であることがわかった。

衣川橋手前を左折踏査

九月三日 平泉駅前 10:00 …… 高館 10:17 …… 衣川橋手前を左折し、衣川に沿った旧道をいる 10:45 …… (一)からは藪と化し目印に出来るものがない。…… 10:56 衣関道の延長かと思われる地点。先は藪と化して道は無い。中尊寺側の地形は急な崖となり、中尊寺に通じる道は不可能と考えられ、土石崩れが道幅を狭めている。東北自動車道手前の道路がタスキがけになっている、熊出没注意の看板をよそに、中尊寺に至る舗装道路に出る。 11:38 …… 中尊寺 12:29 白山神社・金色堂など …… 月見坂 …… 柳の御所・伽羅御所 …… 平泉駅 13:20 三時間余りとなったものの衣川があるために泉城・月山には行けなかった。やはり衣川が妨げとなる。中尊寺から月見坂を下り、平泉駅付近まで五十分で到着できた。また、衣川橋より衣の関道までは、衣川に沿った直線であることから十分ほどの距離であることがわかった。

芭蕉は中尊寺から泉城へ歩いて行った

聞き取り調査一、浅い衣川

1, 川東集落での聞き取り。衣川が浅いことから、昭和四〇年頃まで、川東集落から中尊寺に歩いて二十分ほどで行った。
2, 泉城に行く途中の橋付近で、鮎釣り人の姿を見ると膝下ほどの深さであり、尋ねると深いところもあるが、総じて浅い川だという。

聞き取り調査二、泉城跡・中尊寺間は徒歩で行った

1, 泉城跡に住まいされる方に尋ねてみると、現在衣川となっている中尊寺・泉城跡間は窪地ではあったものの川ではなく陸続であったことから、中尊寺までは三〇分ほどで行けた。

2, 昭和二十二年十月の大災害をもたらしたカサリン台風によって朝に目の前に川ができていた。

3, 月山神社までは戸河内川へかないを歩いて渡っていたが、近年は橋が架かったものの、平成十七年の台風で橋が落ちて今は渡れない。

4, 『旅日記』にみる「泉城ヨリ西霧山見ゆルト云ドモ見ヘズ。」とあるが、尋ねた地元集落の方々は知らないと返答が帰ってきた。

聞き取り調査三、霧山は修験の山

一, 平泉町役場建設課に尋ねると、戸河内川は上流で南又川と北又川の二つに分かれるが、その南又川上流が霧山で、修験の山として信仰が厚かったということであった。黒羽において修験光明寺に招かれ行者堂での吟、「夏山に足

駄を拝む門出哉」に込めたように、俳諧修行旅の身として役行者の健脚にあやかりたいという願いがあったものであろうか。月山といい霧山といい曾良は誰かに教えられたものではなかったか。

二、中尊寺と泉城の間に川は無く、昭和二十二年に出来たもの。窪地であったことは確かだが、川は無かった。

芭蕉と曾良が辿った行程

一関から奥州街道を平泉に到着するや一路高館まで直行し、坂下集落から(衣川橋手前)を左折。衣川を渡らずに川に沿って衣川集落(今は消失してない)を通り衣関道(道は現在通ることができず、地元の人の話による)を登って中尊寺・中尊寺・光り堂・白山を見学。中尊寺・泉城・月山の往復一時間三十分、仮に衣関道に沿って再び中尊寺に戻り、月見坂を下って平泉に向かったとしても、あるいは衣川に沿って奥州街道に出て現在の平泉駅付近に戻ったとしても、無量光院跡・加羅御所跡を通ることとなり、見学は三時間三十分ほどの行程となり、『旅日記』の日程で可能ということになる。

地形は不変のものと考えていたことに大きな誤解が生じてしまった。「平泉全盛略絵図」なる絵地図と現在の「平泉地図」(昭和四十九年測量・国土地理院二万五千分の一)を信頼したことも無理はなかったのだが。古絵図をよく見ると「平泉全盛略絵図」に不可解なことが幾つかあることに気づく。それは、全盛時には無くてはならない、当然あるはずの中尊寺に通じていたはずの「衣

の関道」が描かれていない。また、当時、泉城と中尊寺の間に川はなく、陸続きであったにもかかわらず、橋が描かれているのである。次に、泉城はぐるり川で囲まれるという昭和二十二年以降の姿で描かれていることである。そして、決定的な誤りは、東西南北のいずれからでも見ることでできる古地図の特徴が西からの絵図が欠落していることである。

その後地震研究者の協力を頂き『大日本帝国陸地測量』「大正二年即図」を見ることが出来た。そこには泉城跡に住まいされる方の体験通り「泉館址」と中尊寺の間に川がなく道となっている。

今後の調査で芭蕉時代の泉城周辺の図を見ることが出来ることを期待したい。また、江戸期の古地図の存在を願うものである。

何れにしても「衣の関道」が歩行渡りできたこと、中尊寺と泉城間が陸続きであった事実から、『曾良随行日記』の記載に誤りはなかったこととなる。